

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：35402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01611

研究課題名(和文) 地域スポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Interaction between Community Sport Promotion and Social Network

研究代表者

岡安 功 (Okayasu, Isao)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：90551664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：近年、地域スポーツの振興について、様々な形のネットワークを通じたアプローチの必要性が報告されている。そこで本研究は、地域スポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用について検証する事を目的とした。本研究の結果からは、地域スポーツの振興におけるネットワークの可能性が示唆された。具体的には、参加者に関しては、ソーシャル・キャピタルの醸成の一助になっている可能性が挙げられた。また組織間では、地域スポーツクラブが、福祉などの地域組織と横断的な連携を通じて、地域のネットワークの強化を行っていることが示唆された。今後、さらに時系列の検証などを通じて、研究を進める必要があると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to define the relationship between the promotion of community sport and social network. Results of the study suggest that it may be possible to promote community sport using social network. Participants of community sport club may be able to raise social capital by social network in community. Sport club within communities can network with other organizations cross-sectorally such as welfare organizations. I believe from now on, we need to implement longitudinal research methods in this study.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：地域スポーツ 地域スポーツクラブ 社会的ネットワーク ソーシャル・キャピタル

1. 研究開始当初の背景

スポーツ基本法によれば、スポーツは、個々人の心身の健康増進や維持などだけでなく、地域の「絆」創りともいえる地域社会の世代を超えた交流の基盤形成などが明記されている。そして、我が国の少子高齢化や消滅可能性都市などの地域社会の抱える問題の解決にも、地域のスポーツ振興による社会的ネットワークの構築の効果は期待されていると考える。

こうした中で、地域スポーツ振興は、健康や福祉などとも関連して今日の地域社会において重要なテーマのひとつとなっている。長登・野川(2014)は、「スポーツを文化として気軽に楽しめるような社会、すなわち誰もが、いつでも、どこでもスポーツに親しむことが出来る社会を実現」することが求められていると指摘している。

一方で、社会的ネットワークの構築は、地域社会において必要不可欠となっている。ソーシャル・キャピタルは、社会的ネットワークを考えるひとつのキーワードとして、我が国のスポーツ科学でも注目され研究も行われてきた。稲葉・山口・伊藤(2015)は、総合型地域スポーツクラブのマネジャーにおけるソーシャル・キャピタルの醸成について研究を行い、他の組織などと連携するソーシャル・キャピタルを形成していることなどを報告した。

しかしながら、社会的ネットワークは、個人だけでなく様々な要因が考えられる。こうした中で、ヘルスプロモーションの分野において McLeroy, Bibeau, Steckler, & Glanz (1988)は、「エコロジカル・アプローチ」という包括的なモデルを提示して注目された。これは、人間の行動が、個人、個人間、組織、コミュニティ、そして政策という複数のレベルの要因によって形成される事を説明したものである。地域のスポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用を考える上でも、このモデルの複数レベルの要因の検証は、重要な示唆を与えると考える。たとえば、住民である地域スポーツクラブ参加者は、単にクラブの参加者だけでなく、自治会やPTA等の様々な活動にも参加しながら日々の生活を送っている。そうした様々な組織の活動を考慮することが、地域スポーツと社会的ネットワークの相互作用を検証する上でも不可欠である。

そこで本研究では、地域スポーツ振興と社会的ネットワークについての相互作用について検証を行う。

2. 研究の目的

本研究は、地域スポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用について検証する事を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、地域スポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用について検証する事を目的にして、平成 27、28、29 年度の 3 年間で実行する事を計画した。

平成 27 年度は、前期には地域スポーツ振興、および社会的ネットワークに関する先行研究を概観する。また後期には、行政担当者へのインタビュー調査を実施した。

平成 28 年度は、調査対象とした地域スポーツクラブにおける質問紙調査を実施して、現状の把握を行った。

平成 29 年度は、地域スポーツクラブ参加者を対象とした半構造化インタビューを実施して、より詳細に状況を把握した。

4. 研究成果

(1) 地域スポーツクラブ、および地域の各種組織へのインタビュー調査及び視察

当該クラブに関して、地域の様々なクラブと連携をしながら、地域のスポーツ振興を進めていることが明らかになった。地域スポーツ振興における参加者のネットワークは、様々な組織を経由しながら繋がっていることが明らかとなった。

地域スポーツクラブにおける地域のネットワークの促進に関しては、様々な取り組みが進められている。たとえば、地域スポーツクラブだけでなく、様々な地域資源を多くの住民に知ってもらい取り組みとして、「運動マップ」、「介護マップ」、さらに「お食事マップ」を作成している。こうしたマップは、地域スポーツクラブのみならず、住みやすい地域づくりの観点からも、そしてクラブが様々な地元の公共も民間も含めた組織とつながる意味でも重要である。

さらに、健康フェアの開催なども、地域スポーツクラブだけでなく、地域全体を巻き込んだ取り組みである。その他にも、様々な取り組みが進められているが、そのどれも、他の地域組織との連携がひとつのキーポイントである。たとえば、地域スポーツクラブが、包括支援センターなどとの連携は、地域スポーツクラブが一つの触媒としての機能にもなると考える。またこうした公共・民間の組織の隔てなく月に1回程度でミーティングを開催して、短期だけでなく、中・長期的視点で地域の発展を検討している。

また、週末には、高等学校の体育施設を活用して、スポーツをする場所の提供を非常に安価な料金で行っている。一部の種目は、指導も行っているが、中学生が部活動以外の時間の練習の場所として利用したり、家族でスポーツを楽しむ場所として利用している。サッカーに関しては、中学校を卒業して進学先がバラバラになった高校生が集い楽しめる環境になっている事は、今後の生涯スポーツとしての機会の提供にもつながると考える。

その他、防災とスポーツを合体させたイベ

ントも開催している。自治会や消防団などと連携して、様々な情報提供と運動の機会という2つを提供し、様々な住民に関心を持ってもらう機会を提供している。こうした事も、スポーツ組織として出来る事の枠を超えて、地域の各種組織と連携によるコミュニケーションの結果であり、こうした広がり、地域全体の強固なネットワーク構築にもつながると考える。

また個別には、福祉関係の組織との連携プログラムも進んでいる。少子高齢化の中では、福祉とスポーツ組織の連携は、効果や意義ある活動が促進されることが期待される。

さらに、地元のプロスポーツクラブ（今回はJリーグクラブ）との連携など、地域のスポーツ資源を活用した横断的取り組みが、これからの地域スポーツクラブには求められると考える。

下記の図は、今回の調査をまとめたものである。地域スポーツクラブを核としつつも、包括支援センターやプロスポーツクラブなどと連携して、それぞれの長所をのばし、一方で短所を補完しながら、地域のスポーツ振興を進めている有機的なつながりが形成されていくと考える。今回の調査対象にした地域は、プロのサッカークラブがホームタウンとしてあったり、他の地域に比べて恵まれたスポーツ環境が備わっているとも考える事が出来る。しかしながら、生涯スポーツの視点で考えると、子どもからお年寄りまで、健常者も障害者も気軽にスポーツが楽しめる環境づくりというところまでは至っていないと考える。今後、様々な地域組織と連携しながら、スポーツだけでなく、様々な文化的活動を提供しながら、地域の有機なネットワークの構築が求められると考える。

平成30年度から、学ぶ場の提供も、この地域の組織が連携して進められている予定である。その中では、スポーツ活動だけでなく、福祉などの要素を踏まえたプログラムが展開されるとの事である。

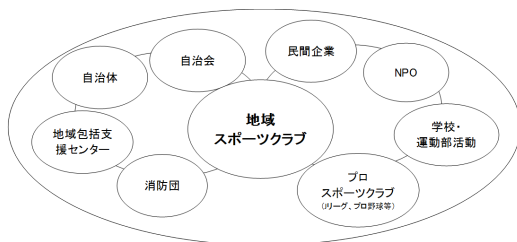


図 地域スポーツクラブを取り巻く社会環境
(インタビュー調査を基に作成)

また会報誌の内容を分析して、これまで地域スポーツクラブが、どのような変遷を経てきたのかを分析した。当該地域スポーツクラブは、平成3年にプロサッカークラブと共同で組織がスタートし、平成12年に会員自主

運営組織に移行して本格的に様々なプログラムが展開されていった。4年後の平成16年にはNPOの法人格を取得した。その後順調に会員数が増加して平成17年には1,000名を超えた。平成18年にはクラブハウスとして体操プログラムなども実施できる場所へ移動した。平成22年には設立20周年を迎え、さらに平成23年には文部科学省の受託事業に策託され、平成24年には地域スポーツに関するシンポジウムの開催や防災とスポーツを結合したイベントの開催など、地域のスポーツ振興だけでなく様々な側面で地域の活動を行ってきた。

(2) クラブ参加者への質問紙調査

クラブの参加者に対して郵送法においてソーシャル・キャピタルに関する質問紙調査を実施した。

結果は、性別に関しては、男性が23人(28%)、女性が58人(71%)であった。

性別によるソーシャル・キャピタル項目に関して、ネットワーク、信頼、互酬性の規範の3つの視点からt検定を行った。結果は、3つの項目に関して、有意な差は認められなかった(ネットワーク:t=0.853、信頼:t=1.735、互酬性の規範:0.016)。

また出身地に関して、地域スポーツクラブの所在地の出身者とそれ以外の地域出身者で分類してt検定を行った。この結果も、ソーシャル・キャピタルの3つの項目に関して、有意な差が認められなかった(ネットワーク:0.707、信頼:1.281、互酬性の規範:4.480)。

さらに、居住歴(長・短)とソーシャル・キャピタルの関係を検証するため、t検定を行った。この結果は、ネットワークについては有意な差が認められなかった(t=0.419)。しかしながら、信頼は0.1%水準で有意な差が認められ(t=6.707)、また互酬性の規範に関しても5%水準で有意な差が認められた(t=2.296)。どちらにおいても、居住歴が長い方が、信頼と互酬性の規範に関するソーシャル・キャピタルが高いことが明らかになった。

(3) クラブ参加者および保護者へのインタビュー調査

今回の調査は、男性2名、女性7名の地域スポーツクラブのプログラム参加者、また3名のサッカープログラム参加者(小学生)の保護者(女性)であった。

まずプログラム参加者に関する結果である。クラブを知ったきっかけは、様々であった。ただ、一番多かったのは、家族や友人からの紹介というものであった。この点、地域スポーツクラブという存在が人から人へと広がって行っていることが明らかになった。また一方で、運動できる機会を探す中で、偶然地域スポーツクラブのチラシを見つけたという人もいた。こうして、参加者へのインタビューを通じて、地域スポーツクラブへ

の参加に関しては、家族等の身近な人との紹介もある。しかし一方で、そうした関係のない中で、プログラムへ参加している人もいた。つまり、これまでの地域などにおけるつながりだけでなく、誰もがいつでも気軽にスポーツを楽しむ事が出来るという地域スポーツクラブのコンセプトが実行されている結果になった。

次に、プログラムに参加する子どもの保護者へのインタビューを実施した。概ね30～40代を中心として女性（保護者）においては、子どものスポーツを通じた同年代との交流が進むなど、子どものスポーツ機会が、自らの地域におけるネットワーク構築に影響を与えていることが示された。都市部における地域においては、遊ぶ機会や体を動かす機会として、こうした地域スポーツクラブのプログラムが位置づけられていた。

こうして、参加者および参加者（小学生）の保護者へのインタビューを通じて、地域スポーツクラブの地域に果たす役割や参加者同士のネットワークを検証した。女性参加者や保護者の女性においては、プログラムの参加等を通じて、地域でコミュニケーションの機会を得ていることが示唆された。一方で高齢者の男性の地域参加が課題であり、定年後の参加などにおいて、まだまだ広く深いネットワークの構築には至っておらず、こうした点を今後どのようにして地域全体で改善していくことが出来るかを検討する必要があると考える。

(4) まとめ

本研究では、地域スポーツ振興と社会的ネットワークの相互作用について検証する事を目的とした。

地域スポーツクラブを中心に定量・定性調査を実施した。結果を総合すると、地域スポーツクラブが主体的に各種の地域の組織と連携を進めながら、ネットワークの構築を行っていることが明らかになった。参加者は、個人的なネットワークが地域スポーツクラブへの参加等で強化・維持されていることも明らかになった。一方で、参加者の個人的属性では、居住歴の長短によってソーシャル・キャピタルの2つの側面で差が明らかになった。こうした事は、地域スポーツクラブへの参加以上に、地域への居住歴が地域のネットワークの構築などに影響を与えていることが明らかになった。

文部科学省は、平成27年に今後の地域スポーツ推進方策に関する提言をまとめた。その中のひとつでは、「多様化するライフスタイルやニーズに対応した地域スポーツ環境（プラットフォーム）を整備し、国民のスポーツ参画を促進することが重要」というものであった。まさに、地域スポーツクラブを核としつつ、様々な地域の組織と連携する事で、こうした事が実現すると考える。その意味で、今回の調査対象の地域スポーツクラブ及び

地域は、先進的な地域の様々な組織連携の取り組みが平成24年から進められていた。そしてそれが、機能し、様々な人たちにとって必要な地域のスポーツ環境の整備に貢献している。

また、スポーツをする機会をどのように提供していくのかを考えた時に、前述したとおり、週末に地元の高校の体育施設を活用したスポーツ広場を実施している。指導プログラムでないサッカーやバドミントンは、各自がその時間に集合して準備をして、スポーツを楽しむ、最後は後片付けをして終わる。中学校の体育施設の部活動による共同利用などでもっと練習したいと思う中学生などが参加しているようである。こうした、誰もが、気軽に、いつでもスポーツを楽しめる機会の創出が、地域スポーツ振興において重要である。

さらに、福祉や防災など、様々な地元の組織との連携を通じて、地域のネットワークをさらに強固なものにしていると考えられる。その中で、地域スポーツクラブだからこそ担える役割もあると考える。そして、少子高齢化等の様々な社会問題を各地域が抱える中で、今後そうした事を踏まえた地域スポーツ振興を行う事が出来るのも、地域に根ざした地域スポーツクラブであると考えられる。

しかしながら、まだ当該分野においては、研究課題があると考えられる。どのように住民の地域でのネットワークが構築されているのかについて、縦断的な研究が必要であると考えられる。また、アクションリサーチなどを行う事で求められると考える。そして、こうした研究を通じて、地域住民が住んでいてよかったと思える地域づくりこそが、これからの地域スポーツに関する研究が必要であると考えられる。

<引用資料>

長登健・野川春夫（2014）日本の生涯スポーツ政策における地域スポーツクラブ育成の変遷．10，1/2，1-9．

稲葉慎太郎・山口泰雄・伊藤克広（2015）総合型地域スポーツクラブのクラブマネージャーが形成するソーシャル・キャピタルの特徴に関する研究：テキスト磨イニングを用いたNPO法人の有無の比較より．生涯スポーツ学研究，12，1，25-38．

文部科学省（2017）今後の地域スポーツ推進方策に関する提言

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/025/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2015/07/07/1359647_1_2.pdf

McLeroy KR, Bibeau D, Steckler A, Glanz K. (1988) An ecological perspective on health promotion programs. Health Education & Behavior, 15, 4, 351-77.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

日本生涯スポーツ学会第 19 回大会

地域のスポーツ振興におけるネットワーク化に関する研究 - 地域スポーツクラブに着目して -

岡安功、2017 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡安 功 (OKAYASU, Isao)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：9 0 5 5 1 6 6 4